

# 健康長寿の風土を醸成する 一翼を担って



那覇市保健所長  
国吉 秀樹

平成2年琉球大学医学部卒業。臨床研修を経て、4年沖縄県宮古保健所に採用。5年国立公衆衛生院専門課程にて長期研修。以後、県保健所、県庁（健康増進課長）を経て25年から現職。

私は平成25年4月に、中核市となった那覇市の保健所長になり今日に至っていますが、その前は県の健康増進課長、そしてそれ以前は県の保健所で所長の下で公衆衛生医師として勤務していました。もう若手ではない年齢だと思いますが、新米所長ということで、これまでの活動を振り返ってみることにします。

## 動機は「父親の勧め」

所長になって感じるのは、当然ながら、そうでない公衆衛生医師に比べると権限と裁量の範囲が大きく、より全体を見渡して仕事ができます。しかし、仕事は医師を含めた職員にやってもらうので、所長には別の苦労があることもわかりました。そして思うのは、私は、これまで本当に、公衆衛生医師として内外の幅広い分野で仕事ができる環境を与えていただいていたことです。沖縄県の保健所はかなり自由度が高いと思います。

のが離島の宮古保健所です。その敷地内にはフィリア防圧記念の碑があり、なにより感慨深かったことを記憶しています。

公衆衛生医師は珍しいので、医学生などからよく「先生は何で保健所に入ったのですか」と聞かれます。動機も珍しく「父親の勧め」です。父親は内科の開業医でしたが、進路も決まらずにオペラの練習ばかりしていた私（最近はそのことないのですが）、緊急性がない仕事に向いていると言ったのです。もともと、父も過去に公衆衛生医師の経験があり、歴史的なフィリア防圧事業にかかわったこともあって、公衆衛生のダイナミズムも伝えたかったのでしょう。私が臨床研修終了後、平成4年に沖縄県に採用され、最初に配置され

たのが離島の宮古保健所です。その敷地内にはフィリア防圧記念の碑があり、なにより感慨深かったことを記憶しています。

公衆衛生医師としての初出勤の日、いまでも覚えていますが、当時の所長にごあいさつしたときの忘れられないひと言があります。勢い込んで「今日は何をしたらよいでしょうか」と聞いた私に、所長はニコニコしながら「今日は特にないね」とおっしゃいました。もちろん公衆衛生医師の仕事内容をお聞きしたあとのことではあったのですが、かなりショックを受けました。私はその前月まで、目の回るような臨床研修の病院で働いていましたので、仕事は朝行けば降ってくるものだと思っていたのでしよう。その後、所長からは、じっくり教科書や法律を勉強することと、その時々テーマをいただき、だんだんとペースがつかめ

## 離島の保健所の役割とは

宮古島には県立病院と保健所があり、この2つが専門機関の位置づけです。沖縄本島より規模が小さく、専門職の配置も少ないです。それは人口が少ないため、さまざまな分野で支援するケースも当然少なく、少人数で対応することに文句はありません。ただ、保健所は専門機関としてのスペシャルな対応を求められており、これに正対しなければなりません。ところが数が少ないことで、たとえ

ば難病患者さんの支援などは個別の疾患の経験が乏しく、積み重なりません。これでは専門性を高めるのはなかなか難しいものがあります。また、沖縄本島であれば精神保健福祉センターなど、身近により専門的な機関があり、気軽に相談もできますが、離島にはそれもありません。この状況に、離島の保健所としては、ジェネラルの対応をしっかりとすること、ほかに支援を求めるタイミングを正しくとらえることが重要と考えました。数とは別の特徴ですが、小さな地域では課題と資源をはっきりととらえやすく、保健活動に取りかきやすいこともあります。具体的に取組んだことは、ケーブルテレビを活用した保健情報番組シリーズの制作、離島町村での保健師確保・定着事業、在宅用福祉用具普及事業等ですが、内外の多



沖縄市に建立された「世界長寿地域宣言の碑」

くの関係者と協力し実施できた経験を通して、みずからの公衆衛生医師としてやっていくスタイルのよくなものがつくれたと思います。

## 本島での経験

沖縄本島内の保健所に異動してからは、健康日本21の地方計画策定の時期だったこともあり、多くの市町村と計画策定、モニタリングの作業をともに行いました。PCMやプリシード・プロシードモデルほか策定手法を学んだこと、健康日本21地方計画推進・評価事業（宮古室班）に参加できたこと、また住民参加の計画づくりを健康分野以外から依頼されてアドバイザーになったこと（沖縄県都市計画マスタープラン）等が印象に残っています。この時期に全県、全国に仲間ができ、ネットワークが広がりました。また仕事はすれぱするほど次の仕事があるのだなという感を深くしました。

保健師もそうだと思うのですが、現場の公衆衛生医師の仕事は、地域の資源の力を引き出しながら、活動を前に進めるマネー

ジャーの役割が大きいと感じました。平成19年ころから数年間取り組んだ地域医療連携バスの構築では、地域の病院、クリニックや市町村保健師、療養施設の職員らと連携して一定の成果を取めることができましたが、これは公的機関である保健所が呼びかけ、担当保健師が細やかに各方面をフォローしたことに加えて、医師がマネージャー役だったことが参加者の信頼を得られた理由だと思います。

## 沖縄の健康を担う保健所長として

平成25年2月末日、国から平均寿命の都道府県ランキングが発表され、沖縄県の女性は長年守り続けていた首位の座を譲り渡し、3位となりました。男性は25位だったのが30位とさらに順位を落としました。当時、県の健康増進課長だった私は、マスクミ対応、議会対応に忙殺され、関係団体等各方面から厳しい激励をいただきました。自治体としては、できればこのようなランキングに一喜一憂することなく、健康寿命を延ばせるよう政策を考えていきたいと思う

のですが、昨今は長寿復活に関心が集中しています。もともと本県の健康課題で特に生活習慣病対策が重要なのはその通りで、これだけ県民の健康に話題が集まるのも千載一遇の機会です。

沖縄県は平成7年に「世界長寿地域宣言」を行って世界に向けて発信していますが、いつの日か、温暖な気候、イチヤリパバヨーデー（行き逢えばみな兄弟）の精神、伝統的な食事文化を今日にも生かし、また輝きを取り戻したいものです。

所長になって、就任早々に発病者2人、感染者50人余の小学校の大規模結核集団感染事例を経験しましたが、多くの方のご協力をいただきましたながら、何とか無事、適切に対応することができました。対応方針の決定から、リスクコミュニケーションまで、保健所長としての責任の大きさ、重さを身をもって体験しました。いざというときに踏ん張れる姿勢、態度と、日ごろからの学習と情報収集、さらに信頼できるネットワークをもっておくことを、これからも心がけていきたいと思っています。